**聖霊降臨節第20主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年10月8日**

**「神の住むところ」**

**イザヤ書66章1～2節**

**66:1 主はこう言われる。天はわたしの王座、地はわが足台。あなたたちはどこに／わたしのために神殿を建てうるか。何がわたしの安息の場となりうるか。**

 **66:2 これらはすべて、わたしの手が造り／これらはすべて、それゆえに存在すると／主は言われる。わたしが顧みるのは／苦しむ人、霊の砕かれた人／わたしの言葉におののく人。**

**使徒言行録7章44～53節**

**7:44 わたしたちの先祖には、荒れ野に証しの幕屋がありました。これは、見たままの形に造るようにとモーセに言われた方のお命じになったとおりのものでした。**

 **7:45 この幕屋は、それを受け継いだ先祖たちが、ヨシュアに導かれ、目の前から神が追い払ってくださった異邦人の土地を占領するとき、運び込んだもので、ダビデの時代までそこにありました。**

 **7:46 ダビデは神の御心に適い、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願っていましたが、**

 **7:47 神のために家を建てたのはソロモンでした。**

 **7:48 けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは、預言者も言っているとおりです。**

 **7:49 『主は言われる。「天はわたしの王座、／地はわたしの足台。お前たちは、わたしに／どんな家を建ててくれると言うのか。わたしの憩う場所はどこにあるのか。**

 **7:50 これらはすべて、／わたしの手が造ったものではないか。」』**

 **7:51 かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。**

 **7:52 いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預言した人々を殺しました。そして今や、あなたがたがその方を裏切る者、殺す者となった。**

 **7:53 天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした。」**

**3回にわたって共に御言葉から聞き続けて来たステファノの説教も今日で最後になりました。「律法と神殿を汚している」という言いがかりをつけられて、不当な裁判の場に立たされたステファノが語る説教において、アブラハムから始まるイスラエルの民の歴史を語りました。アブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフ・モーセとモーセに導かれてエジプトを脱出した人々と語るその説教は神の民イスラエルの歴史であると同時に、神様に背き、偶像を礼拝し、罪を犯しても犯してもなおも愛し続けて下さる神様の愛の歴史でもありました。そしてそれはまたステファノ自身がイエス様の十字架の愛によって救われて生かされている、その信仰の喜びの中で語る説教でありました。それはまるでこの分厚い旧約聖書をぎゅっと凝縮したような内容でありますが、説教を結ぶに向かっていよいよ核心部分に至ります。「律法と神殿を汚している」その批判への反論です。**

**ステファノは44節でこのように言います。**

**「わたしたちの先祖には、荒れ野に証しの幕屋がありました。これは、見たままの形に造るようにとモーセに言われた方のお命じになったとおりのものでした。」**

**ステファノは「証しの幕屋」と言います。幕屋とは簡単に言えばテントのような移動式の礼拝所です。神様がモーセにこうこうこうふうに作りなさいと事細かに指示されて作ったテントのような移動式の礼拝所が幕屋です。そしてこの幕屋の一番奥にモーセが神様から与えられた十戒の板を納めていました。それは神様が律法、すなわち神様の言葉を通してイスラエルの民と共にいてくださるということを証しをする幕屋なので「証しの幕屋」なのです。イスラエルの人々は幕屋での礼拝を大切にし、神様の言葉に聞き従って神様が共に歩んで下さる恵みに感謝をしていました。**

**やがて、イスラエルの民はエジプトを脱出して荒野の40年の旅を終え、約束の地カナンの地に定住するようになりました。もう移動しなくていいわけですから、自分たちはテントのような暮らしからきちんとした家を建てて暮らします。そうするとどうなるかと言いますと、「自分たちは立派な家に住んでいるのに、神様は相変わらず幕屋の粗末なテント暮らしでは申し訳ない、神様のために立派な神殿を建てようと」という思いが出てくるのです。神様は幕屋に住んでいるのではなく、私たちと共に歩んで下さっているということはわかっているはずなのですが、人の思いと言いますか神様に申し訳なくなったのです。その思いはダビデからソロモンに引き継がれ、ソロモンは非常に立派な神殿を建て、人々は立派な神殿で神様を礼拝するようになりました。**

　　**ステファノはその立派な神殿を建てたということが神様の前に大きな過ちを犯したと鋭く指摘するのです。**「**けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。」（48節）神様の住まいのための立派な神殿、神様が住むのにふさわしい立派な神殿、その神殿に私たちの存在をはるかに超える神様を人の手で作った小さな神殿に納めこんでしまい、立派な神殿を守るということが神様を守るということであると勘違いしてしまうようになったのです。つまりイスラエルの特に祭儀的指導者たちは神殿＝神、その神が住んでおられる所を汚すなどは彼らにとって絶対に許されないことになったのです。それは神殿を神とする偶像礼拝です。**

**神殿はあくまでもそこで神様を礼拝して神様の御言葉に聞き祈り、その御言葉に生きることが大切であるその場所であるだけなのに、神殿そのものが神になってしまっていて御言葉に聞くこととないがしろにしている、彼らが犯してしまっている罪をステファノは厳しく指摘したのです。**

　**それは旧約聖書イザヤ書66章1～2節を引用して、さらには51節以下で厳しく指摘したのです。**

　「**かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。」**

　**ステファノは自分を裁判の場に立たせているイスラエルの祭儀的指導者たちに「かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち」と言います。割礼とは、**[**イスラエル**](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%EF%BF%BD%EF%BF%BD%EF%BF%BD%EF%BF%BD%EF%BF%BD%E9%A5%A8%EF%BF%BD%EF%BF%BD)**の人々が神さまと救いの契約を結んだ証明として体に刻むしるしです。けれども、どんなに体に割礼を刻んでも、心と耳に割礼を受けていなければ意味がない。つまり、神の言葉に心を開き、聞き従うのでなければ、どんなに神殿が立派でも意味がない。頑なな心で神殿を神とし、必死に神殿を守ろうとしているあなたたちは神の言葉をないがしろにして、聖霊に逆らい神に逆らっているのではないか。さらには、神様の言葉を伝える預言者たちが、神様の言葉を聞くこと、神様に立ち帰ることを一生懸命宣べ伝えても聞く耳を持たずに退けて神様に逆らってしまったのだ。挙句の果てには預言者たちが指し示したイエス・キリストを退けて十字架につけて殺してしまったのだ。あなたたちはそのようにして父なる神様に逆らったのだ。と非常に厳しい指摘で説教を終えたのです。**

**「兄弟であり父である皆さん、聞いてください」（2節）と穏やかな口調で始まったステファノの説教は、最後はイエス・キリストを十字架につけて殺して神様に逆らったのは他でもない「頑なで、心と耳に割礼を受けていない」神の言葉を聞こうとせずないがしろにしているあなたたちなのだとの非常に厳しい指摘で終わりました。**

**私はこのステファノの説教は非常に厳しい説教だと思います。今私たちは教会で神様を礼拝しています。神殿で礼拝しているのではありません。ですからイスラエルの指導者たちが、神殿そのものが神になってしまうというような思いというのはなかなか理解しかねるところがあると思います。ではステファノの説教は教会で礼拝をしている私たちには関係がないのでしょうか。約2000年前の説教と今の私たちの礼拝は無関係だから聞き流していいのでしょうか。**

**ステファノが説教の中で引用したのは今日の旧約聖書の個所イザヤ書66章1～2節です。ステファノは神様は人の手で造った神殿には住まないということを言いたいために2節の途中までしか引用しませんでしたが、私たちが神様を礼拝することのとても大切なことが2節の後半に記されてあります。**

**「わたしが顧みるのは／苦しむ人、霊の砕かれた人／わたしの言葉におののく人。」**

**神様が顧みる、すなわち目を注いで下さるのは、苦しむ人であり、心の砕かれた人であり、神様の言葉に恐れおののく人なのです。苦しみの中で主を求め、心砕かれて、粉々に砕かれて、くじかれて、自分は何も誇れるものがないと打ちひしがれた謙遜な心で主を求め、神様を畏れ神様の言葉にしか頼れるものが何もないと気づかされた人。そのような人たちがただただ神様の前に行き、神様の言葉に謙虚に耳を傾け、ただただ聞き従う、そのような謙虚な礼拝を神様は喜んで下さり、その様な礼拝に神様は共にいてくださるのです。**

**それは「神様、罪人の私を憐れんでください」と胸を打ちながら祈った徴税人のように（ルカ18：13）った心を神様は求めておられるのです。そして、そのような思いでなされる私たちの礼拝の中に神様は共にいてくださるのです。私たちは常に謙った心で御言葉に聞き、御言葉に従って歩んでいきましょう。**